

すべてテレビで学んだ

東洋大学経営学部 非常勤講師

公益財団法人 日本進路指導協会 理事・調査部長

千葉吉裕

『謎の円盤UFO』が英国で放映された1970年から、今年で半世紀を迎えた。日本では、英国の放映からわずか半年後に日本語に吹き替えられて、日本テレビ系列で放映されている。TBS系列の『8時だヨ! 全員集合』と放映時間が重なっていたため、視聴した人は少ないかもしれない。まして、1970年に物心ついた年齢でなければ知らない番組だろう。

『謎の円盤UFO』は、『サンダーバード』を制作したAPフィルムズの作品。時代設定は1980年代で、優れた科学技術を持った異星人が地球に密かに侵入しており、その侵略行為を地球防衛秘密組織が阻止するというドラマ。人々をパニックにさせないために、異星人の存在は秘密、作戦も秘密裏に遂行される。SF仕立てだが、子供の向けの特撮ドラマではなく、シリアスなドラマだった。

1960年代は、日本で家庭にテレビが定着した時代。テレビ関係者は、試行錯誤しながら番組を制作していたことだろう。当時の番組を思い出せば、先を行く西欧の番組を吹き替えて放送することも多かったように思う。昭和でいえば40年代、『名犬ラッシー』『奥さまは魔女』『スパイ大作戦』『バットマン』『じゃじゃ馬億万長者』『わんぱくフリッパー』『大草原の小さな家』『サンダーバード』『宇宙大作戦』『ポパイ』『マイティ・ハークュリー』……、年配の方々には懐かしい番組だ。映画『ミッション・インポッシブル』は『ス

パイ大作戦』と銘打ってテレビ放映された番組の映画版だと知らない若い人も多いかもしれない。『宇宙大作戦』は『スタートレック』の初期のシリーズだ。名作ぞろいだった。

高度成長期の日本、余暇を楽しむ余裕のない貧困の時代だった。テレビに映る西欧の家庭には広いリビングルームがあり、いつもそこで家族がくつろいでいた。1ドル360円の為替相場では、庶民にとって海外旅行は夢のまた夢だった時代、映像でしか知ることのできない西欧は、日本人にとって憧れだった。

そして、正義のために戦う西欧のヒーローは、正体を明かさずに日常を過ごし、危機が迫ると登場する。「やあやあ、我こそは」と名乗りを上げて戦う武士とは違うヒーロー像である。『サンダーバード』のように、莫大な資産を慈善活動に使い、命がけで「地球」を守る様子は、人々の心に浸透した。「グローバル」という言葉が使われる以前は、「地球」という表現を使っていたように思う。今考えれば、これはプロテストアンティズムの倫理観だと解釈できるが、当時は人知れず戦うヒーローに憧れたものである。

また、テレビでは科学が発達した未来を描き、月や宇宙空間を身近な存在にしてくれた。未来都市には超高速の旅客機や鉄道、自動車電話やテレビ電話で会話する様子が描かれていた。1969年のアポロの月面着陸は、テレビで見る未来社会を現実に近いづけ

た。

そのようなテレビ番組は、無意識に価値観をはぐくみ、学ぶ意欲や働く意欲の原動力にもなっていた。学ぶことや働くことが、快適で便利で、可能性に満ちた未来社会につながっているように感じられたからだ。果たして、今の子供たちはテレビからどのような影響を受けているのだろうか。

1960年代は、米ソが対立した時代、冷戦の終結、平和共存を希望する人は多かった。「地球」「平和」という言葉が当たり前のように使われ、人類が一同となって戦う敵の登場は、テレビや映画で定番となった。地球に対する共通の敵は、地球外生物となる。これが、1970年代に爆発的なSFブームにつながっていく。宇宙を舞台にした映画『スターウォーズ』『未知との遭遇』『エイリアン』がその後大ヒットすることになる。

実際、想像の敵は想像でしかなく、現在人類が協力しながら戦っているのはウイルスだ。地球防衛軍も地球防衛秘密組織も国際救助隊も存在しない。国際機関を中心に協力しながら、感染終息に取り組んでいる。ウイルスの遺伝情報や治療法・投薬の効果などの知見を素早く公表し、現場の医療に活かし、感染拡大を防いでいる。人類共通の敵が現実化するのは想像もしていなかったが、ドラマ・映画のエンディングのように、この戦いの先に平和な未来が訪れることを期待したいものだ。